



金沢金魚

プレミアムギフトバコ

金沢金魚

水面に波紋を広げながら、のびやかに泳ぐ金魚がモチーフのお香立てとお香のセット。「見えないインテリア」ともいわれるお香は、日本では室町時代からたしなまれていた歴史の深いものです。九谷焼の豆皿から真鍮の金魚、線香に貼り箱まで、すべてを県内で制作している「金沢金魚」。

火を点けたお香からゆっくりと立ち上る煙のように、ゆったりとした時間が過ぎることでしょう。売り上げの一部は、能登復興支援に使われます。



このカタログでは、下記の商品からお選びいただけます。



商品番号 | 6851

金沢金魚（白箱）

揺れる水面をイメージした清楚な白色の九谷焼の香皿に、金色の金魚の香立て。金沢の香舗「伽羅」オリジナルの白檀の香りの線香がセットになっています。

セット内容/ お香皿（直径約85mm／九谷焼・白色）
お香立て（真鍮製）、お香5本（白檀）



商品番号 | 6852

金沢金魚（桜色箱）

揺れる水面をイメージした華やかな桜色の九谷焼の香皿に、金色の金魚の香立て。金沢の香舗「伽羅」オリジナルの白檀の香りの線香がセットになっています。

セット内容/ お香皿（直径約85mm／九谷焼・桜色）
お香立て（真鍮製）、お香5本（白檀）



商品番号 | 6853

金沢金魚（水色箱）

揺れる水面をイメージした清らかな水色の九谷焼の香皿に、金色の金魚の香立て。金沢の香舗「伽羅」オリジナルの沈香の香りの線香がセットになっています。

セット内容/ お香皿（直径約85mm／九谷焼・水色）
お香立て（真鍮製）、お香5本（沈香）



商品番号 | 6854

金沢金魚（瑠璃色箱）

揺れる水面をイメージした神秘的な瑠璃色の九谷焼の香皿に、金色の金魚の香立て。金沢の香舗「伽羅」オリジナルの沈香の香りの線香がセットになっています。

セット内容/ お香皿（直径約85mm／九谷焼・瑠璃色）
お香立て（真鍮製）、お香5本（沈香）

What's

— 金沢金魚とは —

1. 金沢で活躍する
工芸プロデューサーが企画
2. 金魚の香立て、香皿、貼り箱まで
すべて地元の作り手が制作
3. 売り上げの一部は
能登復興支援として寄付

「金沢金魚」は4つの色と2つの香りで展開。
場所や気分で使い分けるほか、プレゼントにもぴったり。



作り手と使い手をつなぐ立場で ものづくりを行うデザイン事務所

石川県・金沢を活動拠点にするデザイン事務所として、多くの工房、工場などを訪ねまわることのできる地場の特徴を活かし、様々な工芸の工房や職人、製造メーカーとの密なコミュニケーションから生まれるものづくり、商品開発を展開しています。

root design office

石川県金沢市尾山町6-22 Zig 2F
TEL 076-255-0801
[Instagram] ryosuke_harashima

Here!



金沢の工芸の技が結集した 和のアロマグッズ「金沢金魚」

五感のひとつ、嗅覚を刺激する香り。生活の中にアロマグッズを取り入れている人も少なくないのではないのでしょうか。

「金沢金魚」は、水面を泳ぐ金魚の姿をモチーフにした和のアロマです。

水面模様を写したような豆皿は九谷焼、真鍮の金魚は金沢の記章メーカー、お香はせせらぎ通りの香舗が手掛けています。セットを収める貼り箱まで、地元の作り手によるものです。

もともとは、金沢21世紀美術館ミュージアムショップなど、金沢でしか手に入れることができない「地域限定」の商品でした。

その「金沢金魚」の販売が拡大したのは、2024年元旦に起こった能登半島地震がきっかけです。



上/豆皿に浮かぶ水紋の微妙な色味や金魚の大きさ、フォルムは、作り手と幾度も話し合いと試作を重ねたもの。水の中をのびやかに泳いでいるように見えます。

下/豆皿、金魚、香に貼り箱まで、オール金沢にこだわった。職人や地元企業と橋渡しを行ってきた原嶋さんだからこそ実現した商品です。

伝統と現代の融合を 毎日の暮らしの中に

「金沢金魚」をプロデュースしたのは、家具デザイナーで工芸ディレクターの原嶋亮輔さん。子供の頃から工作が好きで、高校生になってからは美術や工芸に興味を持ったといいます。

「「職人」という職業に漠然とした憧れがあって、でもジャンルを一つに絞ることができなかった」と話す原嶋さん。「デザイナーという立場からなら、さまざまなジャンルの職人と関わることができるんじゃないか」と考えたそうです。

そんな原嶋さんの代表作のひとつが、古民具にガラスや金属などの素材を組み合わせた家具のシリーズ。長い時を経て一旦は役割を終えた道具がより魅力的な存在として、現代の暮らしに溶け込むような作品です。

自ら作品を作成するほか、伝統工芸の産地や企業とのプロジェクトなどを中心に活動を展開。シャチハタ・ニュープロダクト・デザイン・コンペティション深澤賞、おしゃれメッセ2009メインビジュアルコンペ大賞、石川県デザイン展 金沢市長賞などを受賞しており、作品だけでなくアーティストとしての姿勢が高く評価されているアーティストでありプロデューサーです。

古きものと新しきものを 繋ぎ受け継いでいくこと

原嶋さんは作品を2017年から珠州市で開催されている「奥能登国際芸術祭」でも展示しています。その際に能登との結びつきも深くなったそうです。

「芸術祭では、これまでのように職人だけでなく、地域の人々にもお世話になりました。その人たちのため、魅力的な能登のため、自分にできることはないだろうかと考えました」。

そしてたどり着いたのが地域限定販売だった「金沢金魚」の販売拡大。ひとつは、この地を訪れなくても金沢を感じられるように、もうひとつは売り上げの一部を能登復興支援として寄付をするために。

「能登は、古いものを大切に今に受け継ぐ土地です。使い込まれた道具たちはどれも大切にされてきたことがわかるほど。その気質は私が拠点を置く金沢を含め石川県全体に根付いています」。

奥能登国際芸術祭2023 撮影:岡村喜知郎



上/奥能登国際芸術祭2023に出品された原嶋さんの作品。

中/古いものと新しいものが混在するオフィス。原嶋さんのアイデアの根源であり、空間自体も作品に見えてきます。

下/アイデアは、趣味の散歩中に降ってくることが多いのだとか。落書きのようにスケッチすることで思いがけない変化を遂げることもあるのだそう。

そんな人々の気質や風土を未来に受け継ぐことも、現代を生きる自分たちの役割だと原嶋さんはいます。

県内各地の伝統の技術を結集した「金沢金魚」もそこに連なるものです。

九谷焼の豆皿に描かれた水紋の上、あぶくの代わりに甘い香りをくゆらせる金魚は、どこかノスタルジーを掻きたてながら、空間を心地よく整えるはず。



原嶋 亮輔さん

家具デザイナー／アーティスト。金沢を拠点に、地域の工芸・産業に関わりながら多岐にわたる商品開発やデザインプロジェクトに携わる。自身も古民具や伝統工芸がもつ時間性と変容をテーマにした作品を製作。2022年から金沢クラフトビジネス創造機構工芸ディレクター。